

心的情報処理モデルを活用したグループ学習による福祉支援スキルアップの検討

岡田太造¹ 沢井佳子² 青野修一³ 西ミキ⁴ 石川翔吾⁵

概要： 困りごとを抱える人の支援を担当する市役所の職員を対象とした福祉支援スキルアップのための研修を実施し、その研修の効果の評価について述べる。困りごとを抱える人は、過去に様々な対人関係での失敗経験等を有していることが多い。そうした経験等に基づく行動が、社会一般の人々が共有している社会的価値観に適合せず問題行動と捉えられることがある。研修は、人工知能学知見を活用した心的状況理解手法を用いて、現在の問題行動を引き起こす心的な情報処理プロセスにおいて、過去の失敗経験等が重要な要因となっている考え方を理解してもらうことを目標とした。研修の結果、過去の経験等が心的情報処理プロセスを通じ現在の問題行動の背景にあることの理解が進んだことが明らかになっている。

キーワード： 福祉支援スキルアップ, 心的情報処理モデル, グループ学習

A Study of Improving Welfare Support Skills through Group Learning Using a Mental Information Processing Model

TAIZO OKADA¹ YOSHIKO SAWAI² SHUICHI AONO³
MIKI NISHI⁴ SHOUGO ISHIKAWA⁵

Abstract: This paper describes the implementation of a training program to improve welfare support skills for city hall staff who are in charge of supporting people with problems, and an evaluation of the effectiveness of the training. People with problems often have experienced various failures in interpersonal relationships in the past. Behaviors based on such experiences are sometimes regarded as problematic behaviors because they do not conform to the social values shared by the general public. The goal of the training was to help participants understand the concept that past experiences of failure are an important factor in the mental information processing process that causes current problematic behaviors, using a method for understanding mental situations that utilizes artificial intelligence. As a result of the training, it became clear that the participants were able to understand that past experiences, etc. are behind the current problematic behavior through the mental information processing process.

Keywords: Improving Welfare Support Skills, Mental Information Processing Model, Group Learning

1. はじめに

生活困窮者支援の現場などでは、「困った人」と思われる人たちの支援が行われている。こうした人たちは、様々な問題行動を起こすことがある。支援にあたっては、問題行動の背景にあるものを考え、行動を起こす理由を考えることが必要である。しかし、問題行動は、社会の構成員が共有する価値観に反する行動であり、こうした価値観から離れない限り、その行動の背景を考えることが困難となっている。

マービン・ミンスキーが提唱する愛着学習の理論は、愛着関係を通して、社会的価値観を親から子どもなどに継承

されることを示している。逆に、このミンスキーの愛着学習の理論は、児童虐待などにより親子の間等で適切な愛着関係が構築できずに、成長した子どもは社会的価値観を共有できず、その行動が社会的価値観を基準として考えると、問題と考えられる行動（問題行動）をとる可能性があることを示唆している。

現に、生活困窮者支援の現場では、様々な「生きづらさ」を抱えながら生活している人たちの中には、幼少期に虐待の経験をしていたり、学校などでのイジメ等を経験していることが少なくない。こうした人たちがとる社会的価値観に反した行動を問題行動としてとらえ、「困った人」と見なして、どのように支援して良いかわからず、対応に苦慮していることが少なくない。

今回、愛着学習の理論などマービン・ミンスキーが示した心の中で行われている情報処理プロセスに関する考え方をもとにした研修プログラムを作成し、市役所の相談窓口などにおいて、こうした「困った人」の対応を求められる職員の方々に研修を実施した。本稿は、その結果を報告するものである。

1 静岡大学
Shizuoka University
2 チャイルドラボ
Childlab
3 愛知医科大学
Aichi Medical University
4 加賀市役所
Kaga city
5 静岡大学
Shizuoka University

2. 心的情報処理モデルを活用した研修の設計

2.1 心的情報処理モデル

「困った人」が起こす問題行動の背景にある課題を理解するためには、支援者が保持している社会的価値観から離れて、当事者の方々の心の中で生じていることを客観的な立場から推測することが必要である。今回の研修では、心的情報処理モデルを活用することにより、客観的な立場から心の中で生じていることを推測するための枠組みを提供することを目標とした。

人間の心の中では、現に直面している問題へ対応するため、視覚、聴覚等感覚器官から入力される情報、脳の中に蓄積されている情報を活用し、判断、意思決定等と呼ばれる情報処理を行なっていると考えられる。この際、脳の中に蓄積されている情報としては、過去の成功体験、失敗体験等経験の記憶、過去に学んだ知識、両親等から愛着学習をおして学んだ社会的価値観、知識（文化的継承）等様々な情報が活用可能である。

直面している課題に対して、どのような情報をどのように処理しているのか。その結果、どのような行動をとっているのか。こうした事柄を推測する枠組みとして、「心的情報処理モデル」という言葉を本稿では用いている。

心的情報処理モデルの考え方は、マービン・ミンスキーの『心の社会』及び『ミンスキー博士の脳の探検』を参考としている。

2.2 研修の設計とその効果への期待

研修では、具体的な事例を提示し、「困りごと」の背景で、どのような心的情報処理プロセスが働いているかを考えてもらうものとした。加えて、協調学習（グループワーク）の仕組みを取り入れた。事例としては、生活困窮者支援の現場で起こったトラブル事例を用いている。

具体的に、事例1として研修で活用した事例を取り上げてみる。この事例は、ある男性が近隣トラブルを起こしているものである。隣に住む男性の生活音（足音、イビキ）がうるさいと怒鳴り込んだりしている。幼少期に父親からの家庭内暴力が原因で両親が離婚していることが分かっている。

トラブルを起こしている男性の心の中でどのような情報処理のプロセスが働いているかを考えてみる。聴覚からの情報として、隣の男性の生活音が入ってくる。その音を、過去の経験の記憶等をもとに、足音、イビキの音と解釈するのである。しかし、過去の経験の記憶等を参照する際に、父親の家庭内暴力の記憶が蘇ってきていると考えることができる。男性にとっては、父親の暴力からどう逃れるかが、当面解決すべき課題（目標）となる。このため、社会的価値観からは考えられない程度の厳しい態度で隣の男性に対処している状況にあると考えられる。

このように心的情報処理モデルを活用して男性の背景にある課題を考えることにより、社会常識に反して厳しい対応をする「困った」人と理解されていたものが、過去に辛い家庭内暴力を経験し、その記憶に苦しんでいる人と理解が変容することが可能となる。

グループワークの仕組みを取り入れることにより、心的情報処理モデルの枠組みへの当てはめ方の多様性が生まれる効果を期待している。特定の価値観に囚われた固定的な思考を変容させることができ、一人で考える思考では気付けない視野に思考を広げることができるデザインとなっている。

さらに、福祉的支援は、これまで支援者が認知する問題に対して、どのような制度や支援手法を適用するかという視点で考えている。これに対して、今回の心的情報処理プロセスを活用することによって、当事者がどのような課題を抱え、どのような考えを持っているかという当事者視点に基づくアプローチが可能になる。ピア・サポートと呼ばれる当事者が当事者の支援を行う手法は、経験的に大きな効果をもたらすことはよく知られていることである。心的情報処理モデルの手法を活用することにより、ピア・サポートが効果をもたらす機序を明らかにし、それを参考として支援の手法を検討することも期待できる。

3. 研修の実施

3.1 実施方法及び参加者

研修は、2022年1月18日（金）及び2月10日（木）の2回に分けて実施した。研修の受講者は、加賀市役所の会議室において受講した。講師は、東京からオンラインで実施した。参加者は加賀市役所の職員であり、第1回（1月18日実施）は26名が参加した。26名のうち、保健師、栄養士、保育士、児童福祉司、ケアマネジャーの専門職が13名、事務職が13名であった。第2回（2月10日実施）は、24名が参加した。24名のうち、専門職が12名、事務職が12名であった。

参加者は5つのグループに別れて、グループワークを行った。最初に講師からの説明ののち事例（一つ又は二つ）を提示する。その後、事例に基づいて、個人ワークをした後、グループワークを行った。各グループのファシリテーターが、グループワークでの議論の状況を報告し、講師がコメントする形で行った。グループワークは、各回3回づつ行った。

3.2 研修の内容

研修の内容及びその背景にある考え方を、第1回、第2回ごとに以下のとおり、概説する。

(1) 第1回

- 問題行動は支援する側が「問題」と考える行動であ

り、当事者本人にとっては、困りごとや不安の表現である。このため、こうした行動に「どのような意味があるか」を考えることの必要性を強調した。このことについて、理解を深めるため、事例1を提示してグループワークを行なった。

- **事例1** (近隣トラブルを起こしている男性。幼少期に父親のDVにより両親が離婚した経験がある。当時の経験が、隣人の足音、イビキ等への過剰な反応を引き起こしている。)
- 人間の行動を次に二段階の情報処理プロセスとして考えることを説明し、当該人間が有している「知識、過去の経験、価値観等」が情報処理のプロセスの中で重要な役割を果たしている。(図1参照)
 1. 外界の情報(視覚、聴覚等の情報)をもとに過去の経験などを活用して「状況理解」するための認知プロセス
 2. 目指す目標と理解された状況(現状)との違い(差分)を最小化する行動を選択

人間の行動を情報処理プロセスとしてみると

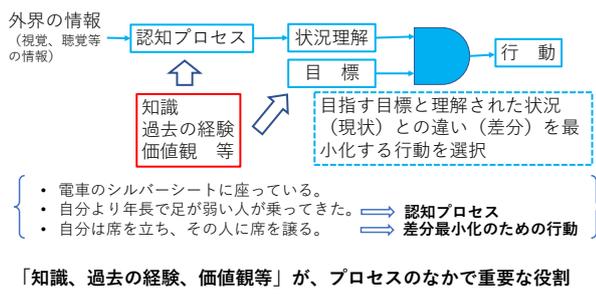


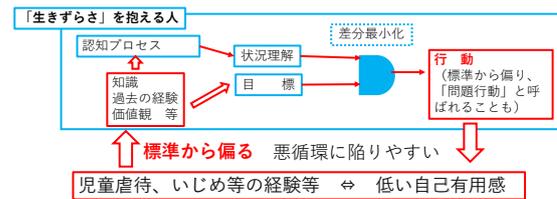
図1 情報処理プロセスとしての人間の行動

Figure 1 Human behavior as an information processing process

- 「生きづらさ」を抱える人は、児童虐待、いじめ等を経験していることが少なくない。こうした経験は、標準から偏った「知識、過去の経験、価値観等」を形成する。この情報をもとに認知や意思決定等の情報処理が行われるため、社会価値観に反する(標準から偏った)「問題行動」を生み出している。「問題行動」の背景に課題を考えるためには、当事者の方がどのような「知識、過去の経験、価値観等」を保持しているかを確認する必要がある。そのため、その人の生育歴を聞き取ることが重要となる。(図2参照)

「生きづらさ」の背景には、偏った「知識、過去の経験、価値観等」

「生きづらさ」を抱える人=児童虐待、いじめ等を経験している例が少なくない



➡ 生育歴の確認し、背景にある課題を考えることが必要

図2 「生きづらさ」を抱える人の情報処理プロセス

Figure 2 Information processing process of people with "difficulty in living"

- 他者との愛着や信頼関係によって得られるものとしては、どのようなものがあるか。M. ミンスキー『ミンスキー博士の脳の探検』で提唱されている愛着学習の理論について、同書で示されているキャロルの泥遊び(図3参照)の例を用いて説明した。

『ミンスキー博士の脳の探検』—キャロルの泥遊びの例

フォーク、スプーン、カップを持っていて、おまごとのケーキを焼くことが目標。

- **一人遊び**
 カップを泥で一杯にしたい。
 フォークを試してみたが、うまくいかない → イライラ、がっかり
 スプーンを使ったら、一杯にでき → 満足、喜び
- **見知らぬ人が叱る**
 見知らぬ人が通りかかり、小言「なんて行儀の悪いんでしょう」
 → 不安、警戒心、恐れ
 → 作業を中断し、母親のもとに走る。
- **母親が叱る**
 母親「こんなにドロドロにして、服や顔についた泥を見なさい」
 → 恥ずかしくなり、泣き出す

図3 『ミンスキー博士の脳の探検』におけるキャロルの泥遊び

Figure 3 Carol's mud play in M. Minsky "Emotion Machine"

- 同書で示されている愛着学習の理論の骨子は以下のとおりと解釈される。
 1. **一人遊び** 人を介さない学習であり、試行錯誤の学習である。
 2. **見知らぬ人が叱る** 愛着基盤のない人からの叱責には不安を感じ、そのような状況から逃避しようとする。安心できる場所である母親のところへ逃避する。泥遊びをするという目標を変えた訳ではない。
 3. **母親が叱る** 愛着基盤のある人からの叱責には、「恥ずかしさ」を感じ、目標を変え、行動が変容する。逆に、愛着基盤のある人からの賞賛から、「誇り」を感じ、目標が正しいと考え、行動を強化する。

- ミンスキーの愛着学習の理論を通して、他者との愛着や信頼関係（愛着のより広い形）が果たしている役割を次のように捉える。

1. **安心・安全の「場所」** 「見知らぬ人」（愛着関係のない人）から叱られるという状況は、キャロルにとってはとても不安な状況である。そうした不安な状況から、愛着関係のある母親のもとに逃避することにより、不安を解消しようとする。このことは、愛着関係が子どもにとって、安心・安全な「場所」を提供していることを示している。
2. **一貫性のある社会的価値観の継承** キャロルは安心を求めて母親のところへ走っていくが、母親からは「こんなにドロドロにして、服や顔についた泥を見なさい」と叱られ、恥ずかしくなって泣き出す。キャロルは、泥遊びをしないことを学んだ。この例のように、愛着関係のある人からの叱責（あるいは賞賛）が、「恥ずかしい」（あるいは「誇らしい」という感情をとおして、どのような目標を持つべきかを学習している。愛着関係のある人の賞賛あるいは叱責は、その人が保持している社会的価値観を基準として行われる。従って、愛着学習の結果として、愛着関係のある人の社会的価値観が子どもに引き継がれることとなる。
3. **「自己」の確立** 愛着学習が進み、価値観の継承が進むと、愛着関係のある人が、その場になくても、どのような判断をするかを理解できるようになり、愛着関係のある人を心の中に内在化できるようになる。愛着関係を形成する対象となる人は、母親だけでなく、父親やロールモデルになるような人等複数存在することが一般的であり、そうした多数の人の価値観を内在化することにより、「自己」が確立していく。

- 以上のようなミンスキーの愛着学習の仕組みの理解を図るため、次の二つの事例を提示して、グループワークを行った。

1. **事例 2**（愛着関係が適切に形成できないため、安心・安全な「場所」を確保できていない事例を提示した。この場合、他者の様子を常に気にせざるを得ず、自己の確立ができない。）
2. **事例 3**（愛着や信頼関係がある人から、社会的価値観が受け継げなかったケースを提示した。清潔、服飾、金銭管理等日常生活上で様々な困りごとを抱えて生活している。）

(2) 第 2 回

- 状況理解や目標の設定に影響を与える「知識、過去

の経験、価値観等」をより一般化して考えると、ミンスキーの「自己モデル」の考えが活用できる。この考えを利用して、困りごとを抱える人の支援のあり方を考える。その人が、どのような自己モデルと持ち、どのように自己モデルを変容させていくかを考えることが、支援のあり方を考える上で重要である。

- 行動の背景にあるものを考えるため、図 4 で示すとおり、自分が理想としている自己モデルと自分が認識している現実の自己モデルを対比させて考え、両者の差分を解消するための行動を起こしていると考え。自己モデル（理想）は社会的価値観を反映していることが多く、個人の方では変えられないことが多くある。このため、差分がどのような行動によっても解消されないことがあり、心の葛藤につながり、これが様々な症状の背景にあると考えることができる。

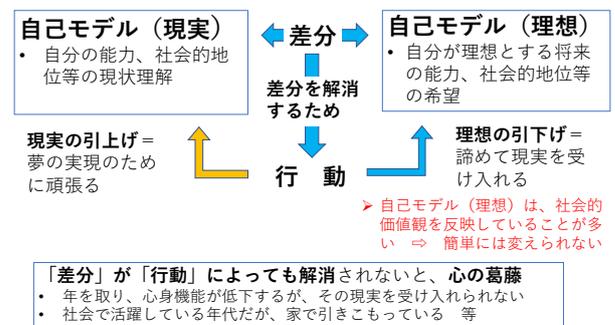


図 4 自己モデルを活用した行動

Figure 4 Behavior using self-model

- 「問題行動」の背景を、自己モデル（理想）と自己モデル（現実）との差分として考える事例 1 を提示してグループワークを実施した。
- **事例 1**（認知症による空間認知の障害により食事の際にこぼしてしまう高齢者が、全介助での食事を嫌がって、デイサービスへの通所を拒否）
- 自己モデル（現実）がどのように形成されているかを考えることも重要である。特に、生活困窮者等生きづらさを抱えている人は、過去、様々な局面で対人関係の失敗を経験していることが少なくない。こうした失敗経験の積み重ねが、「自分は色々なことがうまくこなせない」といった自己モデル（現実）となっている。自己有用感が低いと言われる状態は、こうした失敗経験の積み重ねのうえにある。

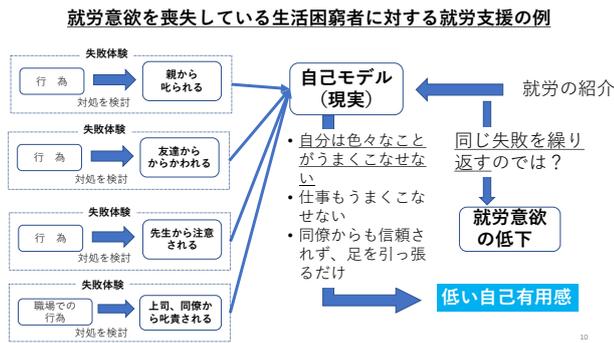


図5 就労意欲を喪失している生活困窮者

Figure 5 People in need who have lost the will to work

- 自己有用感が低い自己モデル（現実）を保持している人の支援には、成功体験を積重ねることにより新しい自己モデル（現実）を形成することが必要である。
- 自己モデルを変容させる成功体験は、個人的な成功体験よりも対人関係における成功体験の積重ねが必要である。対人関係の成功体験は、他者による「承認」などのポジティブな反応である。
- このため、支援にあたっては他者による「承認」などが受けられやすい環境づくりを行うことが必要である。例えば、当事者の方々に何らかの役割を担ってもらい、役割を果たすことにより、他者からのポジティブな反応を受けられるような環境づくりを考えていく必要がある。

自己モデルを変容させる「成功体験」

- 失敗経験 = 他者からの「拒否」、「無視」、「叱責」等
- 成功経験 = 他者からの「承認」、「受入れ」、「感謝」等

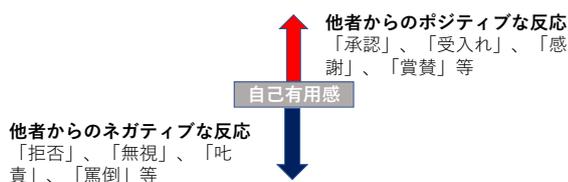


図6 自己モデルを変容させる成功体験

Figure 6 Successful experience in transforming self-model

- 自己有用感を高めることにつながった二つの取組み事例を示し、グループワークを行った。
 1. **事例2** (引きこもりや不登校の若者に対して農園での作業の場を提供。農園では、支援を受けるのではなく、支援を行う立場になるなど役割を与えられ、こうした取組みを継続することにより、一般就労が可能になる等の成果をあげている。)

2. **事例3** (生活保護受給者にホームヘルパー同行事業を実施し、訪問先のお年寄りの話し相手になることを求めたところ、帰る際に、お年寄りから感謝の言葉が伝えられ、その言葉が自己有用感の向上につながった。)

- 最後に個人の支援の事例だけでなく、地域づくりにつながる多くの人が関わっている事例を提示してグループワークを行った。
 1. **事例4** (「認知症の人を支える訓練」を地域活動として行っていたが、活動の中心となっていた人やその家族が認知症の症状が出るとなると、認知症になることが「恥ずかしい」と考える人が少なからず出てきている。結果として、この地域活動が認知症の人に対する差別を生み出したとも考えられる)
 2. **事例5** (認知症の幻視として座敷童子が見える人を、一緒に生活している人皆んなでその人の話を否定せず、座敷童子がいるとして振る舞うことにより、怖かった座敷童子が共同生活の場に幸せを運んで来る存在に変容した。)
- 事例4のような、支援の対象となることを「恥」と考え支援を拒否する事例については、個々人の支援のあり方では解決の糸口がない。しかし、視野を広げると、支援を受けている人も地域の中で何らかの役割があり、活躍できる環境にあることが、支援を受けることに対する抵抗感をなくすために重要である。こうした考えに基づき、個々人の支援だけでなく、地域づくりのあり方も意識する必要があるとの考えから、事例4及び事例5のような地域づくりの事例を示し、グループワークを実施した。

4. 研修結果の分析

各回研修の終了時に、アンケートをとった。アンケートの内容は、次のとおりである、

- 第1日目には、ワークショップに対する感想(「良かった」、「良くなかった」、「どちらでもない」から選択、その理由の自由記述)、ワークショップの内容(「理解できた」、「難しかった」、「どちらでもない」から選択)、今後気をつけなければならないと考えたこと(自由記述)、その他の意見・感想(自由記述)についてアンケートをとった。
- 第2日目には、第1日目のアンケートに加え、前回のワークショップ以降自分が変わったと感じること(自由記述)についてアンケートをとった。各回のワークショップに対する感想及び内容理解の状況については、表1から表4にとおりであった。

4.1 第1回の研修の評価

第1回は、参加者26名のうち24名からアンケートの回答を得たが、うち22名が「良かった」という感想であり、「良くない」は0名、「どちらでもない」が2名であった。また、内容理解の状況を見ると、「理解できた」が21名と大部分の参加者に理解してもらえたことが分かる。

表1 第1回のワークショップの感想

Table1 Impressions of the first workshop

職種	良かった	良くなかった	どちらでもない	無回答	合計	参加者
事務職	12	0	0	0	12	13
専門職	10	0	2	0	12	13
合計	22	0	2	0	24	26

表2 第1回のワークショップの内容理解

Table2 Understanding of the content of the first workshop

職種	理解できた	難しかった	どちらでもない	無回答	合計	参加者
事務職	10	2	0	0	12	13
専門職	11	0	1	0	12	13
合計	21	2	1	0	24	26

第1回の感想の理由をしてみる。使われているキーワードで分類してみると、以下のことがわかった。

- 「背景」というキーワードを9名の方が用いており、問題行動の背景を考えることの重要性について理解が深まったことが分かる。
- 「プロセス」が4名、「図」が3名の方が用いている。「図1 情報処理プロセスとしての人間の行動」で示した人間の行動を心的情報処理のプロセスとして捉えて考えることが分かりやすかったとの評価をしている。今回の研修の目標である心的情報処理モデルについての理解が得られていると考えられる。
- 「グループ（グループワーク）」を6名の方が用いており、他機関の支援者とのケースの捉え方の違いを発見できたというコメントも加えると、7名の方が他機関、職種等の考え方に触れ勉強になったと答えており、ワークショップで研修を実施したことの効果が表れていることが分かる。
- 「身近」な事例等を用いている方が5名おり、用いた事例が、特殊ではなく身近で起こりそうだと感じていることが分かる。事例の選定が適切であったことが評価されている。

4.2 第2回の研修の評価

第2回は、参加者24名のうち23名からアンケートの回答を得た。第1回と比べ「どちらでもない」が若干多くなっているが、参加者の多くが「良かった」と評価している。内容理解を見てみると、第1回に比べ事務職を中心に「難しかった」と「どちらでもない」の回答が若干増加しているが、多くの参加者が「理解できた」と評価している。

表3 第2回のワークショップの感想

Table3 Impressions of the second workshop

職種	良かった	良くなかった	どちらでもない	無回答	合計	参加者
事務職	8	0	3	0	11	12
専門職	12	0	0	0	12	12
合計	20	0	3	0	23	24

表4 第2回のワークショップの内容理解

Table4 Understanding of the content of the second workshop

職種	理解できた	難しかった	どちらでもない	無回答	合計	参加者
事務職	6	3	1	0	10	13
専門職	11	1	1	0	13	13
合計	17	4	2	0	23	24

注：事務職1名が「理解できた」と「どちらでもない」の複数の回答を選択している。

第1回の感想と同様に、具体的事例をもとに、グループワークで他の人の意見を聞くことができたことを評価している。加えて、今回の研修の内容に関して、次のことが評価されている。

- 困っている人が、失敗体験が積み重なり困っているという構造が分かりやすかった。
- 市役所に相談に来られる方は、その時点でいろいろなことがうまくいってなかったり、挫折して自己有用感が低い人だと気がついた。
- 困っている人の理想と現実があり、その差分を埋めることで、解決できると知ることができたこと。
- 「支援される」側が、負い目、恥と感じることはない共生、共存することの必要性に気がついた。

また、前回のワークショップ以降自分が変わったと感じることについては、アンケート回答者23名者のうち22名に回答していただいた。その結果を見ると以下のとおり、相談者等に対する姿勢が変わったことを挙げている方が多

くいることが分かった。

- 相談者等の育ってきた環境、背景等を想像、あるいは考えるようになったと回答されている方が、14名いる。
- できない人だから支援が必要と考えていたが、できることに目を向け、言葉がけしていくことを意識するようになった。このような趣旨の回答をされている方が4名いる。
- 部内で困った人への関心が高まり、他の機関へ働きかけやすくなった、みんなと一緒に考えていくようになった等関係者間の連携を意識している方が2名いる。

4.3 全体的な評価

今回の2回の研修を実施し、アンケートを分析し、明らかになったことのうち、以下の2点を強調しておきたい。

1点目は、福祉的支援のスキルアップのために心的情報処理モデルを活用することが期待されることである。今回の研修資料の作成にあたっては、M.ミンスキーの著作で示されている心の動きについてのアイデアを心的情報処理モデルとして、具体的な事例の背景ある課題を考える際の道具として活用した。また、情報処理のプロセスを図示する等分かりやすく説明する工夫を行なった。アンケートの結果でも示されているとおり、多くの研修参加者がそのことを評価している。

今回、題材とした福祉的支援において、当事者の方々が抱える課題や問題などを理解し、整理していく上で、心的情報処理モデルの枠組みを活用していくことは有効な手法であり、事例とそのモデルの枠組みを活用した解釈を積み重ねていくことにより、福祉的支援のスキルアップにつながることを期待される。

また、今回の研修参加者の半分は専門職であり、日頃から専門知識を活用して対人援助に従事されている方々であるが、そうした方々から「分かりやすい」との評価を受けていることは、これらの方々の活用している専門知識と心的情報処理モデルの考え方が競合せず、有機的に連携しあえる可能性を示していると考えられる。

2点目は、第2回のアンケートの結果で触れたが、今回の研修を受けた後、相談者などの育ってきた環境、背景を考える姿勢を意識する職員が増えたことは、重要だと考える。こうした職員の意識の変化は、相談等に当たる職員の相談者に対する態度の変化をもたらしている可能性が高い。相談者にとっては、自分のことを考え、理解しようとしてくれていると感じるのではないだろうか。職員と相談者とのインタラクションが良い方向に変容し、相互の信頼関係の構築がより容易になると思われる。こうした変化は、相談者の姿勢も変容させ、好循環をもたらす可能性がある。

こうした可能性を確認するため、追加的なアンケート調

査等を行うことにより、職員と相談者との間のインタラクションの変化を明らかにすることを検討したい。

5. おわりに

今回の発表は、研修の終了から十分な時間がない中で準備したものであり、アンケート調査の結果の分析を更に進めていく必要がある。第2回のグループワークの音声情報もほとんど活用できていない形での今回の報告となっている。このため、これら情報を整理、活用することにより、今回の研修の成果を更に詳細に分析したい。

また、今回は加賀市職員を対象として調査であったが、今後、他の地域や市役所の職員以外の方々を対象とした研修の実施も検討したい。

謝辞 静岡大学の竹林洋一特任教授、静岡大学の漆畑文哉さん及び島尾青空さん並びに加賀市役所の堀川夏雄市民健康部長はじめ職員の皆さんには、研修の実施にあたって、ご協力いただいたことを感謝いたします。

参考文献

- [1] 佐藤幹夫監修、的場由木編・著『「生きづらさ」を支える本』、言視社、2014年
- [2] M.ミンスキー著、竹林洋一訳『ミンスキー博士の脳の探検』、共立出版株式会社、2009年
- [3] M.ミンスキー著、安西祐一郎訳『心の社会』、産業図書、1990年
- [4] NPO法人自立支援センターふるさとのお水田恵編・著『生きづらさを抱えた人への支援』
- [5] 休眠預金活用事業サイト「農園を活用した子ども・若者支援事業：子どもと生活文化協会（CLCA）」
(<https://kyumin-yokin.info/articles/467>)
- [6] 小林隆児『甘えたくても甘えられない』、河出書房新社、